

---

# 蒼の封印

鈴村弥生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼の封印

### 【Zコード】

N2043X

### 【作者名】

鈴村弥生

### 【あらすじ】

カリスト公国の王宮筆頭魔導士が失踪して一年。真維は积然としない怒りを胸に秘めていた。婚約者である公子セイルロッドを説き伏せて、彼女は消えた魔導士を追つて敵国へ旅立つ。不定期連載です。10／21題名変更しました。元々こちらが本当なんです

## 序章（前書き）

他か止まってるのに新たな連載。自爆？ 見切り発車？ どこかで見た？ キャラの名前被ってる？ いろいろありますが気にせず。一話一話は短めに、さくさく読めるようにしていきたいです。どうぞよろしく。

## 序章

カリスト公国筆頭宫廷魔道師ゼルダ・カドフェルが消息を絶つて、既に一年が経過していた。

コダール大陸でも五指に入るとされる魔力で近隣諸国に名を轟かせる高位の魔導士であり。それ以上に策士として切れの良い頭脳を誇る、世継ぎの公子の懷刀。

わずか二六にして公国の魔導士の頂点に立つ男。

彼の経歴、実力、その全ての観点からみても、これは異常な事態である。

折りしも、彼が失踪した頃と時期を同じくして隣国グリフ王国は、国境を接する近隣諸国へ宣戦布告した。

コダールで最も広い北部一帯を押さえる大国ながら冬には凍る港しかないグリフ王国は、これまで南に位置する国を得んと小競り合いが絶えなかつた。だが、西と東方も巻き込んだ異例の三面戦争へ突入したのは初めてである。

しかもグリフは全ての正規兵に魔術を封じ込めた武器と防具を持たせていた。その威力はすさまじく、一人の兵で小隊一つを易々と倒せる程。

緒戦み見せ付けた脅威は各国を震え上がらせ、その領国線を書き換え続けていた。

幸いカリスト軍は幸運に恵まれたのか、魔法兵器の配布が少ない部隊と対峙したらしく、辛くも防衛線を維持している。

だから、いまだ平和ズレをした諸貴族の中からこんな噂が囁かれるのだ。

「ゼルダ・カドフェルはグリフに寝返ったのだ」

彼が何処に向かい、そして消息を絶つたのか、知っている者は極僅かである。

だが、知っている者ほど、その噂に動搖していた。

なぜなら、彼はグリフに単身潜入り、そして消え去ったのだから

……

カリスト公女、ダイナ・フラン・カリストーナにとつて、最愛の婚約者の失踪は、人生そのものにつけられた大きな痛手であった。

常に傍らにあり、どんな我儘でも笑つて聞いてくれる。

甘やかすばかりだつた年上の幼馴染。

一年前。幼い頃からの許婚であつたグリフの王太子が死んだとされ、グリフ政変の中で婚約が立ち消えたとき、兄の親友である彼が求婚してくれた。

腫れ物を扱うような貴族達の態度の中、彼からの救いの手に天にも昇る心地だつた。

そして彼は理想の恋人となつてくれた。

手すから育てた花を贈つてくれ、常に甘い囁きと優しい腕で包まれる。

元の許婚ともこれほどの恋は出来なかつただろうと親友に語り、ダイナは甘い蜜月に酔つたものだつた。

だからこそ、共に築く未来を信じて疑わなかつた二人目の婚約者の突然の失踪は、柔らかくいとけない心を打ち碎くのに十分な衝撃だつたに違ひない。

追い討ちとして口をがのない宫廷雀たちが、一度も相手を失つた

公女の不幸を皮肉な視線で揶揄し、「男を破滅させる災厄」とまで陰口をささやいた。

心無い噂に、はじめの数ヶ月彼女は憔悴し病床に臥した。

兄の婚約者となつた親友に心からの看病を受けても、公女の絶望は深く回復は遅い。

失踪の理由を知らないが故に、ダイナは自分が捨てられたのだと思い込んでいたからだ。

彼女の兄を含め、その周りの近しい者達は、公女に真実を明かす事も出来ず、ただ手をこまねいて見守るほかに術を持たなかつた。

だが、どんな冬にも春は来る。

絶望に打ちのめされた小さく凍えた心を解かし、暗く閉じ籠つた部屋から明るい光の庭へ。

公女の微笑を取り戻したのは、自身も春風に例えられる優しい心の青年である。

ゼルダ・カドフェル無き今、公子の片腕として国を支える優秀な文官であった。

筆頭魔道師が行方を絶つて一年。

必然的に自然解消となつた婚約と共に憂いは消えたかの如く、公女は新たな婚約者の側で以前と同じ微笑を浮かべている。

心の奥の大きな穴に、硬く扉を閉めて。

## 2・(前書き)

やつと主人公の登場。

「マイ。もう、そんな怖い顔をしないで下さい」

ダイナは、ドレスを選ぶ手を休めずに、窓辺に背を預けて立つたままの親友に語りかけた。

白と金で統一された公女の部屋は、品の良さとカリストの富を象徴している。

カリストは大きな湖を海と繋ぐ大河によって交易が盛んであり、穏やかな天候のおかげで農作物も良く育つ。そして王都を見下ろす靈峰には、希少価値のある宝石も産出していた。

山間の小国ながら、カリストはゴダールでも有数の豊かな国である。

そんな国の姫君の部屋は、調度品の全てが瀟洒で品がある。

白い地に白い花が浮き出る壁紙、白い木材の家具には控えめな金細工の縁飾り。淡いピンクのカーテンは、寝台の天蓋と合わせてあつた。

全てが淡い夢のような部屋の中で濃い蒼を纏う、茶色い髪の少女は追いかけてくる現実だ。

夢の中へ逃げ込むために、公女は殊更手元に視線を向け声だけは明るく張り上げた。

「ねえ。婚礼衣装を選ぶのを、手伝ってくださいませ」

何枚もの純白のドレスが、公女の寝室に広げられている。

御用達の織物商が持ち込んだサンプルは、どれも贅を凝らした見事なもので、若い娘ならばみな一様に目を奪われて然るべき品々だらう。

「貴方の衣装も、一緒に選んでしまいません事？　お兄様がお喜びになりますよ」

もうすぐ姉妹となる親友に向き直つて、楽しげに一枚のドレスを取り上げる。

彼女は兄の婚約者でもあるのだ。

「ほら、これなんて、きっとマイに似合いましてよ」

シンプルなプリンセスラインのタイトドレスには、腰からヒップラインに会わせて、レースのボアが後ろに流れ。大人っぽさとかわいらしさを混在させたデザインは、なるほど少女から女性に成長しつつある、栗毛の少女に似合いそうである。

だが、ほとんど無表情に公女を見詰める濃茶の瞳を、そのドレスは僅かも惹き付けはしなかつた。

今のダイナには、濃茶の瞳は辛く感じられた。もう一人の、深い琥珀を思い出すから……

だから彼女は、さりげなく視線をはずし、再び優しい夢を与えて

くれる品々に顔を向けた。

「気に入りません? むづへ。どれが良いかしら?」

薄紅の髪に指を絡ませ、小さく小首を傾げる。

あくまで楽しげにはしゃぐ公主に、秋葉<sup>アキハ</sup> 真維<sup>マイ</sup>は小さく吐息を吐く。

「それでいいの?」

初めて発された声は、静かでありながら、鞭のように公主の心を打つ。

彼女の声は、追いついてきた現実。

一瞬震えた細い肩は、そのまま軽く竦められた。

「何がですか?」

身についたロイヤルスマイルで見返してくる公主に、容赦の無い問い合わせが投げつけられた。

「このまま結婚していいの? ゼルダの事、本当に忘れたの?」

同じ琥珀の瞳が、親友の瞳に重なる。

ほら、ダイナ。俺が育てた花だ。綺麗だろう? だが……お前さんのほうが綺麗だな……

恥ずかしいですわ、ゼルダ。そんなことを言つたら。

本当の事を言つてるだけなんだぜ。惚れた欲目かな？

ゼルダつたら……

愛してゐるぜ、ダイナ

董色の瞳は、深い琥珀には耐え切れない。公女は再びドレスに目を落とした。柔らかな夢の残滓がまだ残つてゐるやう。

「もちろんですわ。だからいつやつて、一生懸命ドレスを選んでいるんですわ」

「じやあ、何であたしを見ないの？ アルマンと結婚するつて決めてから、あんあたたしの目を、まともに見たこと無いでしょ？」

強い意志が呴きつけられる。公女は俯いたまま、真維に見えないよつこして目を閉じた。

「そんな事ありませんわ。わたくし、マイの顔をちゃんと見ていてましてよ」

ぐいと肩を捕まれ驚いて顔を上げると、トルマロンの双眸が真摯な光を称えて、僅かに見上げてくる。

小柄な少女は、だが誰よりも強い精神を持つていた。  
——

たつた一人でこの世界に迷い込みながら、それでも自分の居場所を切り開くほどに。

その強い精神が、そのままぶつけられる。

「顔じゃないよ、あたしの田つて言つたんだよ。あんたあたしの田をまともに見ようとしてない。辛いんでしょう? あいつと同じ色をしたこの田を見るの」

ついに公女は、苦しげに田を伏せて顔を逸らした。

「マイ、やめてくださいですわ……わたくしは、マイのように強くないんですね……」

両手で掴んだ肩が微かに震えだしたのを感じてか、真維は後悔と共に手を離し謝罪の言葉を返してくる。

「ごめんダイナ。ただね、結婚する前に、本当に後悔しないか聞きたかったの。あたし、あんたがゼルダをどれだけ好きだったか知っているし。ゼルダがあんたをどれだけ大切にしていたか知ってるから

「

だからこそ、二人の幸せを願っていたのだ、自分のためにも……

「もし、まだゼルダが好きで、そのまま結婚するなんなら、アルマンにも悪いじゃない? おせつかいなのは判つてる。でもね、後で苦しむより、今苦しんで、本当の答えを出したって良いじゃない? もし結婚した後にゼルダが帰ってきたら、あんたどうするの?」

親友の問いかけに、董色の瞳にはじめて強い光が宿つた。それは悲しみであり、怒りなかもしれなかつた。心の奥に夢と幻想で蓋をした扉が軋む。

「ゼルダはわたくしを捨てていったんですね。捨てた女が何をしようと、あの人は気にしませんわ」

真維の瞳が、打ちのめされたように揺れた。

「ダイナ……本当にそう思つてるの？ ゼルダがあんたを捨てていつたつて。あいつが、あんたを捨ててグリフに寝返つたつて噂、信じてるの？ セイルとあんたのためだけに生きていたあいつが？」

かすかに震える声が、真維の動搖を教えてくれる。きっと頑なになつているダイナの心に楔を打ち込みたくて、口止めされている真相をいつそここのまま言つてやひつか？ と苛立つたに違ひない。

親友は何時もながら、短気なくせに律儀だ。

勝気な少女が意を決して口を開くのをわずかに覚悟して見詰めた時、背後から柔らかな声がかかつた。

「姫様、マイ、どうですか？ ドレスは決まりましたか～？」

多少間が抜けて聞こえる温和な声音に、公女は救われた心地で微笑を浮かべる。夢が春風に乗つて戻ってきた。

「アルマン……あら、お兄様も？」

公女の声に、今度は真維がはじかれたように振り返る。

寝室の入り口に、公女の新たな婚約者アルマン・ティン・ラムダと、彼の君主である世継ぎの公子、セイルロッド・エルク・カリストー<sup>1</sup>ナが立っていた。

「御婦人方のドレス選びにお邪魔するのは失礼かと思ったが、なにぶん気になつてね」

そういうて微笑む己が婚約者に、真維は強い視線を向けた。

「セイル。あたしもう黙つてられない。言うからね

そう宣言する少女に、公子は僅かに苦笑して首を振る。

「ダイナは知つているよ。ゼルダが何処に行つたのか。私が話した

「なー?」

公子の言葉に、真維は再び公女へ目を向けた。

「私が殿下にお願いしたんです。姫様に、本当の事をお話して欲しいと~」

文官がすまなそつに口を添える。

「……知つてて、出した結論なのね。ダイナ

事の成り行きを自分が知らなかつた苛立ちより、今の現実を把握する為にだろう、真維は公女を見据えた。

「ゼルダはあんたやカリストの為にグリフに行つた。そこで消えた。それを知つて、それでもアルマンを選んだのね」

容赦の無い置み掛けに、公主は親友から背を向け俯く。もう、現実には向き合いたくない。

「決めましたの……もう良いんですね」

震える声が搾り出された。

「ゼルダの事は、忘れましたわ……」

震え始めた細い肩を見かねて、アルマンティンがそっと歩み寄つてくれる。

「姫様」

婚約者の優しい腕に公主はそっと身を寄せ、そのまま辻上げる嗚咽を堪えきれずに泣き出した。

「ダイナ……」

為す術も無く親友を見詰める真緒に、文官は悲しげな微笑をむける。

「マイ。私は、ゼルダ様が戻られるまで、姫様をお守りするつもりです。何時になるかは判りませんが、それまで姫様の笑顔をお守りできるのなら、それで良いんですね」

何処までも優しいその言葉に、腕の中の公主は頭を振る。

「違いますわ、アルマンが好きなんです。わたくしはアルマンが好きなんですか……」

血りに言い聞かせるように、なんども囁きながら、それでも顔は上げられず、公女は泣きつづける。

そして心の奥の扉をさらに硬く閉めるのだ。もう一度と懇しみに囚われないよう。」

真維は、ただ立ち尽くすしかなかった。

「マヘ……リヒタマヘ……

公子に促され、真維は抱きあつ一人を残して、公女の私室を後にした。

## 2・(後書き)

「蒼」について。

蒼という字は、元来鮮やかな青色を表すのだそうですが、Kはなぜか、どうしても、ちょっととくすむか醒めた青色を連想します。で、この話で「蒼」はそういう『あんまり綺麗じやない青色』です。ご了承ください。

「あの二人、セックレス夫婦になるわよ」

私室に戻つて開口一番、己が婚約者の発した科白に、カリストの公子は溜息をついた。

「マイ、そんなあからさまに言わなくても……」

宥めるよつた公子の声など耳を貸さず、トルマリンの瞳が睨みつけてくる。

「アルマンはゼルダが帰つてくるまでの中継ぎの代役のつもりだし、ダイナはゼルダに未練たらたらじやない。あんなの傷口に絆創膏貼つてるだけよ。上手くいきつこないわ」

正確な上容赦の無い現状分析に、ここには居ない親友の姿がだぶる。

本質的に同類なのだと昔彼は言った。それを裏付けるように、真維は筆頭魔道師代行を、見事にこなしてのけていた。

秋葉真維。カリストの慣習で呼ぶならば、マイ・アキハ。

四年前、召還魔法実験の失敗により、何処とも知れぬ異世界から呼び出された少女である。

異世界人は驚くほどの魔力を秘め。その高い魔力を以つて、瞬くうちに国内でも有数の魔導士に成長を遂げて最高位の蒼に順ずる藍

の魔導士となつた。

しかし、彼女の本当の強さは魔導士としての実力ではない。数奇な運命すらも飲み込んで自分に取り込み、笑ってみせる柔軟な精神じゅうじゅうにあると誰もが言つ。

強さと生命力。

全てをあらわす笑顔は太陽に例えられ、彼女の周りの者達を魅了する。

その強さが欲しかつた。たとえ、誰を押し退けよつとも。

あの時の「」の宿命に挫けかけた自分には、何よりも必要な物だつた。

そして獲た筈なのだが。

その笑顔は、最近では稀なものになりつつあつた。

原因は判つてゐる。

親友を気遣う彼女の奥底にある、もう一つの心……

「セイル、聞いてる？」

問い合わせられて、セイルロッドは物思いから浮上した。

「ああ……」

訝しげな茶水晶に、あいまいな笑みを返し、先を促す。

「どんな傷だつて、時間が癒してくれるのは判るし、今のダイナには、アルマンみたいに優しい人が一番必要なのも判るのよ。でもね、優しいばかりじゃ、底わればばかりじゃ、ダイナは弱くなるだけよ」

自分が強いが故に、他人にも同じだけの強さを求めるのは、彼女の悪い癖である。しかも、その強さが並以上である事に気が付いていない。

だが、判つているのだろうか？ そう言つている自分が、泣きそうな顔をしているのを……

「心に治癒魔法は掛けられないよ」

涙を嫌う強い双眸が真つ直ぐに見詰めてくる。

「掛けれるわ、ゼルダなら」

公子が首を振る。

「しかし、あいつは……」

「セイルも、あんな馬鹿げた噂を信じてるの？」

そんな事は無いのを真維自身が良く判つている。

消息を絶つて一年になるにもかかわらず、公子の下知により、筆頭魔導士はゼルダ・カドフルのままである。

彼の消息が判明するまで、その役を解かれる事は無い。

「グリフォには、何度も細作を放つて行方を探させていた。しかし、あれが何処に居るのか、まったく判らないのだ」

公子の言葉に、真維はゆっくりと頭を伏せた。

「セイルは、ゼルダを信じているよね……？」

小さな咳きに、セイルロッドはしっかりと頷く。

「あたりまえだよ。あれの事は誰よりも判っている。カリストを手に入れるためにグリフォに寝返るなど笑止千万。もしこの国が欲しいのなら、ダイナと結婚した時点で私を殺せば良い。あれは王位に最も近い場所に居たのだ」

カドフェル家は何度も公女が降嫁している名門貴族。ゼルダの実母も現王の姉である。王族の範疇に入れても良いほど血は近い。

公女降嫁がすんなり決まったのと同じく、従兄弟である彼の継承権の順位は高かつた。

ダイナを得て王の娘婿となり公子が夭折すれば、確実に王位は転がり込んでくる。

権謀術数と闇を纏う筆頭魔道師には、そのほうがずっと似合っている。

だが、彼は、策を弄するのを好んでも、権力を欲する性質ではな

い。

そもそも公女であるダイナを、妻にと望んだ事自体意外であった。その後ろに見え隠れする彼の本音を読み取れなかつたら、自分はどれだけ反対したか判らないだろう。

常に傍らにあつた、夜空色の親友。決して本心を見せない、優しい偽人。いつわりびと

彼の献身の上に、今の自分は在る。

「細作の人つて魔法持つてないよね」

低い咳きにて、その意図を察して、セイルロッドは真維の腕を掴んだ。

「駄目だ」

鮮やかな紫水晶アメジストが、茶水晶トルマリンを覗き込む。

「だつて、ゼルダがもし捕まつているんなら、きっと厳重な結界の中だよ。あんな化け物なみの魔力の男を閉じ込めておくなんて、生半可なモノじゃない。だつたら、魔力の無い人になんてわからない

「それで君が行くといふのか？」

叱責にも似た声音に、臆する事無く少女が頷く。

「うん」

ふわりと小柄な体を腕の中に引き入れる。

「今のグリフが、魔導士にはどれだけ危険な場所なのか、判つていいのかい？ そんなところに君をやるわけにはいかない」

抱きなれた細い体に腕を回して、愛しい婚約者を抱きしめる。だが、どれほど抱きしめて、体だけ自分に縛り付けたとしても、その自由な精神を縛る事は出来ない。

「グリフが魔道師狩りやエルド族狩りをしているのは知ってるよ、最近は国境を越えてまで誘拐しているらしいって事もね。筆頭魔道師代行には、いろんな情報が入ってくるわ」

腕の中から、至極冷静な声が返つてくる。

「でもね、あのグリフ行きは、本当はあたしの役目だつたでしょう？ 理由は、一曰では魔導士とわからない事。ただの女の子に見えて、そのくせ魔法が使えて、機転が利く。細作としては最適だつて……」

それは以前、グリフの魔法兵器の真相巣を探るべく、ゼルダと二人で人選をした時の判断理由。結局、彼女がその任に付く前に、婚約者として自分の手元に引き込んでしまったのだ。

その代わりに、ゼルダはグリフへ向かつた……

「あたし、自分が遣り残した仕事をしに行きたいの。だから……殿下……お願い」

業と変えられた呼び方に、彼女の意思の固さがにじみ出る。もは

や少女は決断しているのだ。

「マイ……頬はやはりそつするんだね」

小さな頤が「ぐふと頤くのが胸に伝わる。

「『めん、セイル。……でも、その前に』……」

「君の申し出を受ける前に、婚約者にキスをさせてくれ」

我ながら切ない声だと内心で苦笑しながら、見上げてくる細い顎にそっと手をかける。

柔らかな唇に自分のものを重ねながら、セイルロッドは心の中で一つの区切りをつけていった。

「計画が決まつたら、教えるね……」

そう言い残して私室を出て行く真維を、セイルロッドは微笑んで見送った。

椅子に沈み込み、深い溜息が漏れる。

未練がましい事をした。思わず苦笑が漏れる。

もはや時は動き出した。

ならば、自分に出来る事をしよう。自分が摘み取った人生を相手に返す。

それが為すべき事なのだ。

「ゼルダ……マイは動き出したぞ。頼む……生きていてくれ

今はただ、親友の安否が心にかかる……

初夏の日差しの中鮮やかなブーケが宙を舞つ。

紺色のドレスに身を包んだ親友がそれを受け止めたのを見て、花嫁は鮮やかに微笑んだ。

「次は貴方の番でしてよ、マイ」

白い花嫁衣裳の公女は、亜麻色の髪の新郎と共に花を撒かれた道を軽やかに歩み、祝福のアーチをくぐつしていく。

戦時下の不安を払拭する公女の婚礼は、これから一日間の祝宴で祝われる。日ごろの憂さを晴らそうと、カリストの王都は沸き返っていた。

今日の主役達は幸せを体現して、寄り添い微笑みあう。

何の憂いも無いかのように、一人が馬車の上から民へと手を振る。心の中に硬く閉じた扉を抱えて、夢と笑顔で“本当”を覆い隠して、薄紅の花嫁が走り去っていく。

本来なら後続の馬車に乗るはずだった真維は、ブーケを見詰めながらそっと溜息を漏らした。

「お願いダイナ……あたしに、本当の答えを出させて……」

翌朝、馬車はひつそりと出発した。

馬車には三人。藍の魔道師、最高位の蒼を持つ邪眼の魔道師、そしてカリスト初の女騎士。

見送りもまた三人。公子、護衛を兼ねた騎士隊長。少年騎士。

未明の空の下、公子は真維にブーケを渡されて困惑した。

「マイ……私がブーケを貰つて、どうするんだい？」

首を傾げるセイルロッドに、真維はにこりとわらつて見せた。

「だつて、ブーケ貰つたら、速く結婚できるつて言つじゃない」

常に見たいと切望していた陽だまりの笑みに、心の奥が微かに痛む。

「私は、当分花嫁を貰えそうに無いんだがね？」

つい漏らした皮肉に、一瞬ひるんだ少女は、それでも笑みを消さずにセイルロッドを見返した。

「ごめん、セイル。でも、わがままを聞いてくれてりがとう」

真摯な言葉にセイルロッドは首を振つて微笑んだ。公子としてのロイヤルスマイルではなく。生地の青年として。

「君は、君の道を行くとい。それが一番似あつていいからね」

「うふ。必ず、ジ踏んだボケナスを見つけてくるわ」

そういうて笑う真維に、少年騎士のギルがにやりと笑う。

「ジ踏んだボケナスって、ゼルダ様か？」

「あたりまえじゃん」

真維の答えを受けて、ギルが笑い出す。

何時ものように屈託のない笑い声が、別れの空気を吹き飛ばしてくれるのが、真維とセイルロッドにはあり難かつた。

彼は近日、近衛騎士隊長レグナムに率いられて前線に向かう、その別れも兼ねた見送りであった。

しかし、少年騎士には、初陣への氣後れは微塵も無いようである。

「ギルも、がんばって武勲を上げなよ」

激励に、しつかりと頷く姿には、もつ以前の悪戯坊主の影は無い。一人の騎士がそこに立っている。

「まかしきな、グリフをカリストに一步だって入れねえよ」

レグナムに、なにやら指示を受けていたセリフイーが真維に歩み寄り、出発の時を告げた。

「お~け~いこ~か

明るい一聲で一向は馬車に乗り込み、いよいよ本当の別れだと真維は窓外から見上げてくる公子を見つめた。

「クレイス、笛を頬むべ」

セイルロッードの言葉に、邪眼の魔導士は静かに頷く。

「善処します」

相変わらずの返答に苦笑しつつ、渡されたブーケから黄色い花を抜き出して、真維の髪に飾った。

「お守りだ、持つていへといへ」

怪訝そうな顔をする少女に、公子は微笑を深めた。

「その花の名前は“五月”とこづんだ」

今月の名前を冠された花は、小さじが、鮮やかな日の光を思わせる黄色で、可憐といつよりは、元気の良さを感じさせる。

「ありがと、セイル」

車窓から微笑む少女の頬に、祝福の口付けを落として、公子はそつと身を引く。

「では、お別れだ、マイ。行くが良い」

「うん、じゃあね」

出発の指示を受け、御者が手綱を振り、馬車は動き出す。

窓から首を出し、手を振りつづける少女に応えながら、セイルロッドは一人じゅうちた。

「さりばだ、マイ。きっとその花が君を守ってくれる……」

「計画を確認しよう」

馬車で四日、最前線の北の砦に近づいた頃、クレイス・ラムダが一人の同行者に口を開いた。

「クレイ。これで何度目?」

いい加減あきれた声が真維から発される。

無理もない。

ここに来るまでの四日間クレイスは、事ある毎に計画の確認をしているのだ。

実際、彼が口を開いたら、それしか言わないのではないかというぐらいの頻度なのだから真維は食傷気味だ。

「失敗したら後は無いんだぞ。第一俺は、北の砦から先には付いていけないんだからな」

ぎりりと伊達眼鏡の奥から、翡翠の瞳が睨んでくる。

亞麻色の髪も緑の瞳も、顔の造作も同じなのに。アルマンデインとは正反対の険しい表情が双子だということを信じさせない青年。それがクレイス・ラムダだ。

ゼルダと並び、カリスト公国最高位の蒼の魔導士である。

高い魔力故に邪眼とまで呼ばれるその瞳は、精靈や幽界の地まで見通すと噂される。実際彼は神殿や墓地を極端に嫌い近寄らない。眼鏡は余計なモノを見ないように、呪いが掛けてあるのだという。

明らかに魔導士と判る彼には、グリフ国内に潜入する事は出来なかつた。その為、北の砦からの後方支援に徹する事となる。

「一回失敗したら、何度確認してもおんなじだつてば、第一計画つづーたつて、あんたが北の砦でまつてる。あたしとフィーがグリフに潜り込んでゼルダを探し出す。これだけじゃない」

呑気に言い返す元被保護者を、元保護者は更に睨みつけた。

「お前のどことん無謀な計画で、お前が勝手にドジを踏むのは構わんが、それに付き合わされるセリフィの身にもなつてみろ」

クレイスの言葉に、真維はにやりと笑う。

「へえ～ほお～」

「なんだよ」

楽しげに光りだした茶水晶に、邪眼の魔導士は眉を顰めた。

「さすがの朴念仁も、奥さんの事は心配かあ

落とされた爆弾に、青年の頬が朱に染まる。

「な……何言つてんだ！　俺は殿下からお前達を預かつた責任が」

「まあまあまあ、むきになりなさんなつて。そうだよねえ、新婚さんだもんねえ」

双子の兄、アルマンデインよりも数ヶ月早く、クレイスはセリフイスと結婚していた。エルド族という、思春期に性別が決まる特殊な種族の出であるセリフイスが、遅い分化で女性に固定するのを待つての結婚だった。

月毎に性別の替わる金髪翠眼の絶世の美形、な見習い騎士に翻弄される邪眼の魔導士が、仲間の話題になつたのも良い思い出だ。

「お前なあ、それとこれとは関係ないだりうー」

赤くなつて言い募る良人を見ながら、同じように頬を染めた新妻がそつと声をかける。

「真維、あんまりからかわないで下さい」

もう一人の親友の困惑する姿に、ちうりと舌をだしして、肩を竦める。

「「」めん……でもね、感謝してる」

不意に変わつた聲音に、二組の翡翠が真維に向けられた。

「嬉しかつたよ、クレイとフイーが一緒に来るつて言つてくれた時」

馬車の振動でずれかける眼鏡を直しながら、青年魔導士は苦笑してみせた。

「お前一人を放り出せるわけ無いだろう。それに……わざわざからかいにやつて来る物好きな人がいなくて、俺も物足りなかつたからな……」

彼なりに心配を表す、少してれた様子に、真維は微笑む。

「うん……そうだね。あのさ、クレイ、フィー。安心して。たとえ、どんなことがあつたって、フィーだけは、絶対にクレインんとこに帰すから。あたしの我儘につき合わせるんだもの、絶対にフィーは守るから……だから……だから……」

「真維、やめろ」

クレイスは座席から腰を浮かせて真維の肩を掴み、言葉をさえぎつた。

「守るだの、帰すだの、お前はセリフィを馬鹿にしてるのか？ たとえ魔法が使えなくとも、セリフィは騎士だ。こいつは、自分の身ぐらひは、自分で守れる。たとえ一人になつても、自力で帰つてくれるだけの頭もある。こいつがグリフに行つて、帰つてきたのを知つていいだろ？ 何をしに一緒に行くと思ってるんだ？ お前の手伝いをする為だぞ、お前に守られる為じゃない、足手纏いになるんなら、行かない方がマシだ」

きつい物言いだが、気負い過ぎるな、といつ氣遣いが感じられて、真維は泣き笑いのような顔になつた。

「クレイ……」

「第一、前にも言つた筈だぞ、魔導士の言葉には力が籠る。死に行くような言い方はするな」

そう言い放ち、座席に直る。だが視線は真維を見据えたままだった。

真つ直ぐな翡翠の瞳に、優しい光が籠つている。

ぶつきらぼうで無愛想な青年は、本当は双子の兄と同じくらい優しい心を持っていた。ただ、表す方法を知らないのだ。

真維はそれをよく知っている。魔法実験の失敗で召喚してしまった責任を取るとして、自分の後見を買って出てくれた。元の世界へ帰る方法を必死で探してくれたし、その助けになるだどうと魔法の教育も手ずから指導してくれた。（ただし、ハンパないスバルタだつたけれど）

セリフィスとの恋すらも、自分への責任が済むまではと、後回しにして……死にかけた。

不器用で優しい元保護者。

じわりと、喉の奥が熱くなる。こみ上げてくる涙をどうにか飲み込んで、真維は大きく頷き、再び満面の笑みで一人に向き直る。

「そだね、ごめん。じゃあ、一人とも、よろしく頼むわ

業と軽い口調で言えば、むすりとしたまま、クレイスが頷いた。

「はじめからそう言えば良いんだよ

「真維、がんばりましょうね」

セリフイスに微笑み返し、再び元保護者を見ながら、真維はしみじみと首を振る。

「それにしても、クレイツ……お父さんみたいだねえ」

再びの爆弾投下に、ラムダ夫妻は真維を凝視した。

「え、？」

「だつて、元保護者だし。あー、でも三つしか違わないから、お兄ちゃんか」

真維は自分の思いつきが気に入つたらしく、指を折つて年を勘定してはけらけらと笑い出す。

クレイスはさも嫌そうに眉を寄せる。

「騒動しか持ち込まん、お前みたいな妹は願い下げだ」

「あ、ひっどおい」

口を尖らせる真維に、セリフイスがくすくすと笑い出した。

「私は、真維なら何時でも妹になつて欲しいです。あ、でも、娘でも良いかも……」

「セリフイ？」

田を剥ぐ良人に、彼女は鮮やかに微笑んでみせる。

「だつて、真維は可愛いですから」

「おまえなあ……」

クレイスが溜息をつくのと、真維が歎声を上げてセリフィスに抱きつくるのが同時だった。

「キャー、ファー！ 嬉しいっ」

華奢な体で、やはり細身の少女を抱きとめて、セリフィスは田を細めた。

時々見せる妻の実に男らしい表情に、自分に出会わなかったら絶対男になっていたのではないかと、クレイスは想つ。

縁一点の男の思惑なぞ何処吹く風で、女たちは勝手な相談をはじめていた。

「じゃあさ、あたしが娘だったら、何時産んだのかな？」

「そうですね。クレイ、何時にしまじょうか？」

緊張感の吹き飛ぶ言葉に、クレイスはがっくりと肩を落とした。

「勝手にじる……」

北の中央砦は、グリフ国境を望む要衝である。

この砦から僅か北へ数キロの谷に国境線が敷かれ、更に数キロ先にはグリフ側の砦が置かれている。

グリフの魔法兵器の実態を探るべく、真維達はここに来た事があった。

奇襲に見舞われながらもどうにか捕虜を得て、結果は上首尾に終わりゼルダや公子を喜ばせたものだ。

因みに、その作戦で魔法院と騎士団が協力したのが、クレイスとセリフィスの馴れ初めとなつたのは余談である。

作戦後に保護した難民の少女から得た情報で、魔法兵器の製造工場の場所が判明した。その現状を確かめるべく、単身グリフに潜入したセリフィスが持ち帰った情報により、魔法兵器製造の悲惨さが浮き彫りにされた。

母の安否を問う少女のたつての願いで真維はグリフに行く予定だつたが、それが決まつた直後に、セイルロッドの求婚を受け、国内に留まざるを得なくなつた。

代わりにゼルダ・カドフェルが少女を連れ、グリフに向かつたのである。

ゼルダの姿が最後に確認されたのもこの砦であり、彼はここから

旅立ち消息を絶つたのだ。

一年半振りに訪れた砦は、物々しく武装した兵士達が、北の国境線を睨みつつ警戒を強めていた。

駐屯している部隊の数も格段に増え、激しい攻防戦に何度も見舞われたらしく、砦の外壁には幾つもの魔法攻撃の残滓が生々しく残っている。

ここが最前線なのだと、肌で感じる。

今は小康状態といえたが、何時本格的な戦闘がはじまらないとも限らないのだ。

そんな場所で、クレイスは一人、真維達を待つ事になる。

砦で一日かけて準備を整えた翌日。

夜明けを待たずに一人は出発した。

門外まで出て二人を見送るクレイスに、セリフィスは心配そうな目を向ける。

揺れる妻の瞳に、クレイスは苦笑で答えた。

「何て顔してる。俺は蒼を拝領している魔導士だ。ここに派遣されているどの魔導士より魔力は高い。戦闘があつたって、自分の身位は守れるさ」

安心させるようにわざと言葉を連ねる良人へ、セリフイスはそつと頷く。

「貴方の力は信じています。私が心配なのは、皆の事です」

意味が解らず首を傾げる良人に、新妻は微かに頬を染めて囁くような声を出す。

「皆の部屋は、全て石造りで……あの。夜、一人で寝る時、冷えるのじゃないかと……」

「……何言い出すんだ、お前？」

いきなり妙な事を言われて、クレイスは当惑した。

セリフイスも、自分の言葉がどう取られたのかに気が付いて慌てて首を振る。

「え？ あ……い、いえ、そういう意味じゃなくて……」

夫婦の会話というものは、傍で聞いていて嬉しいものではない。

ましてやこっちが独り者となれば……居たたまれない事甚だしいわけだ。

真維はさりげなく荷物を抱え、なるべくさりげなく一人に声をかけた。

「いけない、あたし、忘れ物してきた、ちょっと戻るね」

たいへんたいへん。などと呟いて、一人が返事をするまもなく門の中に駆け込んでしまつ。

その後姿を見送つて、クレイスは微かに苦笑する。

昔、似たような氣の使い方を別の人からされた事がある。普段は執拗にからかうくせに、何かにつけてさりげない気遣いをしてみせる。優しいペテン師の姿が真維に重なつて見えた。

職業柄もあるのだろうが、真維は彼の人物によく似ている。どこがと聞かれれば返答に困るが、敢えて言つならば精神の強さや在り方かもしれない。

思えば、妻と結び付けてくれたのも、真維とゼルダだった。二人が居なければ、今の自分は無いだろう。

同僚の策謀で失敗に陥つた魔法実験が思い出される。

壊れた魔法陣が呼び出した、凶悪なドラゴンの息吹で焼かれた身体、肉を裂いた爪。

即座に受けた治癒魔法でさえも、焼け石に水といった有様だったと兄から聞いた。

そこまで瀕死の大怪我を追いながら、頑なに転地療養を拒んでいたのは。ドラゴンの炎を恐れもせずに助けに来てくれたセリフィスの姿が、頭から離れられなかつたから。

真維を還す方法を見つけないとだと、戦争目前なのに仕事は放

り出せないだとか。ろくに意識も保てないくせにあれこれ言い訳をする本心は、セリフイスの心が知りたいからだつた。ただそれだけに固執していた大阿呆に、二人が確かめる機会を作つてくれた。

それがなければどうなつていただろう?

意地を張つてそのまま命を落としたか。怪我を理由に、養生先の田舎に引きこもつたままか。そんな程度に違いない。

間違いなく、こうして愛しい者の視線を受け止める事はできなかつた筈である。

だからクレイスは、赤くなつてしまふになつてゐる妻をそつと引き寄せた。

「く……くれい?」

驚く妻を胸の中に包み込んで、邪眼の魔導士は低く笑う。

「いつたい何が言いたいんだ、セリフイ?」

路上であるのを気にして身を硬くしたセリフイスは、肌に馴染んだ温もりに促されて、クレイスの肩に顔を埋める。

細い腕があずあずと背に回され、左手が何かをなぞるよつに動かされる。

「私が心配なのは……嘘のなかで体を冷やしたら。この傷が、また痛むのではないかと……それが気になつて……」

クレイスの右半身には肩から足にかけて、引きつりケロイドになつた傷痕が生々しく刻まれていた。

ドラゴンの爪で引き千切れかけた腕や壊死すら始まつていた足は、半分以上肉の削げた歪な傷跡を曝してはいたが、妻の手厚い看護によつて再び大地を踏んでいる。

だが完治はしたもの、季節の変わり田などには時折ひどく痛む。セリフイスはそれを案じているらしい。

妻の気遣いが嬉しくて、クレイスは腕に力を籠めた。

「気にするな、寒けりや誰かに頼んで毛皮でも貰つた。それに暖炉もあるしな」

「はい……」

ようやつと力を抜いてきた体が愛しくて、クレイスは微笑を深くしたまま妻のぬくもりを楽しんでいた。

頭の隅で、夜明け前の薄暗さをあり難く思つ。

「あの……クレイ。そもそも行かないと……夜が明けてしまいます。マイを呼んできますね」

さすがに時間が気になりだしたセリフイスが、腕の中で身じろぎ始める。

クレイスは少しだけ身体を離して、鮮やかな緑の瞳を覗き込んだ。

今朝のセリフィスは、グリフ潜入の為に、髪を黒く染めている。

人間の数倍の魔力を持ち、金髪に翠眼か碧眼。目も覚めるような絶世の美貌に加えて、思春期までは月単位で性別が移ろいつ。それが美神の末裔すくねと云われるエルド族の特徴で、性別を固定するには恋をする事。妻が自分に向ってくれた想いだ。

魔導士狩りをしているグリフは、当然魔法に秀で魔力の高いエルド族も狩っていた。

たとえ突然変異で魔法が一切使えないとはいっても、エルド狩りの本場に当のエルド族が乗り込むのだ、特徴である金の髪は悪目立ちしそうなるという事で、鳥の濡れ羽色で艶かしく染め上げた。

だが、この変装は失敗だったかもしれない。なぜなら、水準以上の容姿が、黒い髪に縁取られることで更に際立ち、そのうえ、翡翠の瞳が黒髪に映え過ぎる。

エルド狩りの魔の手は逃れても、邪な輩が寄つてくるかもしれない。

い。

そこまで考えて苦笑する。

その邪な輩を片っ端から叩きのめしていく妻の姿は、実のところ王都名物の一つなのだ。

彼女の能力を信頼しよう。

それができる相手だからこそ、自分の心を捉えて離さないのだから

「クレイ。どうしました？」

小首を傾げる妻に、そつと顔を近づける。

「マイなら、気を利かしてくれたんだよ……少しだけ、甘えむ」と  
にじみつ

自分も随分変わったものだ。頭の隅で苦笑しながら、ゆっくりと、  
妻の唇に、口付けを落とした。

「まつたく……見せ付けてくれますねえ」

門の内側で様子を伺いながら、真維はニヤニヤと一人ごちた。

良識人の夫婦は、人前では滅多に互いの愛情を表したりしない。  
見詰め合うだけで全てが通じている、と言わんばかりに、行儀良く  
離れてしまう。

普通ならそれで良いだろう、だが、今回はどうやらも危険の前に身  
を曝して、次に会える保証すらないのだ。珠には後朝の別れとやら  
をしてみても罰は当たらぬだろ。

まあ、その為には周りでお膳立てをしてやらないとならないのだ  
が……

「難儀な夫婦だよね

口では文句染みたことを呴きながら、自分の思惑に満足して頬が緩む。ぶきつちよ夫婦のお膳立てをしては覗き見したりからかったりするのは、彼女の趣味の一つだつたりするからだ。

「マイ殿？」

「いやつべ戻後から不意に名を呼ばれた。

「つも？」

思わず奇声を漏らした真維が慌てて顔を引き締めて振り向くと、皆の責任者である士官が立っていた。奇声に関してはスルーしてくれるようなので、とりあえず姿勢を正して向き直る。

「なんでしょう？」

出発の報告はしたはずだがと首を傾げる真維に、士官は緊張した面持ちで歩み寄った。

「たつた今、鳩の知らせがありました。お耳に入れておいた方がいい事なので……」

簡素簡潔を旨とする騎士の珍しげ言ことよどむ姿に、嫌なものを感じて眉を寄せた。

「何？ 教えて」

辺りを憚るよつて耳打ちされた言葉にて、真維の眉間に更に皺を深くした。

## 2・(後書き)

クレイの脳内のろけでした(\*、ー、ー、ー、ー)

グリフとの国境線を越えるには、一種類の方法がある。

北の中央砦から伸びる街道を行き、あちらの砦に作られた関所を通る方法。

戦時下の現在。そこが通れるはずも無い。

したがって、真維とセリフィスは、街道や砦を大きく迂回する、森を突つ切る道を選ぶこととなる。

道といつても獸道である。

近隣の村娘といった地味な姿に身を纏した一人組みは、どちらも慣れない長いスカートと數との攻防戦に、苛々しながら進んでいた。  
「つたくもう、何だつてみんな、こんな長いスカート履くんだらうね」

何時もは、こだわつのミニースカートといつ軽装の真維が、ぶつぶつとぼやいでいる。

「もう少しです、森を抜ければ、迎えがいるはずですから、あ痛ッ」

慰めを口にするセリフィスが、小枝に髪を絡めて悲鳴をあげる。

その姿に力なく笑つてみせて、真維は眉を顰めた。

「迎え……居ないかもしれないよ」

意外な言葉に、小枝から髪を取り戻そうとしていた女騎士の手が止まる。

「え？」

「さつきさ、皆の隊長さんから、知らせを受けたの」

夜が明けかけた薄暗がりの中、トルマリンの瞳が不吉な光を放つようだ。魔導士になつてからの真維は時々こんな目をする。

その姿に、もう一人の、琥珀の瞳の魔導士が重なる。

『世の中に、背中を預けられる剣士が三人居るが、お前はその一人だ』と言つてくれた魔導士。彼が時折見せていた闇に融けるような不吉な雰囲気を、何時の間にか真維も発するようになつていた。

「どのよつな」とですか?』

いやな予感を抱きながら、真維に問い合わせる。

女魔導士は小さくため息をついて、覚悟を決めた。

「アルムが、処刑された」

「な……なんて」と……』

手にしていた小枝をぱきりと折り取り、セリフィスは真維に向き直つた。

「何時です？」

「四日前らしいわ。どうも、味方の裏切りで、アジトを急襲されたらしいの。捕らえられてから、公開処刑まで、たった一日だったそうよ」

アルムとは前グリフォン王の遺児、アルムレイド・ルーラッハ・グリフの事である。叔父である現国王によつて父王を暗殺された上、無理やり廃嫡させられた彼は野に下り、地下に潜つて現体制を覆すべくレジスタンス活動に身を投じていた。

彼はカリストに援助を求め、セイルロッドは密かにレジスタンスの後押しをしていた。同盟と呼ばれた密約の席に真維もまた筆頭魔導士代行として列席し、傍聴でありながら強い意志に裏打ちされた青年と言葉を交わしている。

以来、欠かすことなく連絡を取り合い、セイルロッドの細作の手助けも、彼らが受け持つてくれた。

今回の潜入に関しても、レジスタンスの協力が不可欠であったのだが。その主格であるアルムレイドの刑死は、計画の大半の瓦解を意味していた。

「替え玉という事は無いのですか？ アルムレイド殿下は、機転の利かるお方です」

セリフイスの言葉に、真維は苦笑しながら首を振る。

「だとしたら有難いんだけどね。確認は取れてないけど、思いつき

り本人つていう線が濃厚らしいわ。それにもし迎えがきていたとしても、裏切りがあつた限りは信用できないって事よ」

衝撃を飲み込むために、セリフイスは大きく息を吸い込んだ。次にゅうくつと吐き出し、下腹に力を籠める。

レグナムに叩き込まれた、平常心を取り戻す方法である。

顔を上げた時には、翡翠の瞳には動搖の色は消えていた。

「マイ、戻りますか？」

違つた答えを確信している問いかけに、真維もまたにやりと笑つて首を振る。

「これって、あたし等にひとつはピンチだけど、チャンスでもあるわ

ゆつくりと歩き出す。セリフイスがそれに続く。

「彼が処刑された事で、グリフはレジスタンスの報復を警戒しても、どこかで安心している筈よ。かなり惨たらしい公開処刑だったらしくから、これで抵抗する気力が減るだろうってね。アルムには悪いけど、この機に乗じさせてもらうわ。それに、単独のほうがあたし等の素性がばれ難いから動きやすいとも言える」

足の調達がちょっと厳しくなるけど、やるつさやないでしょ。と笑う真維の姿に、セリフイスは思わず呟いた。

「マイ、貴方は、ゼルダ様に似てきましたね」

「これには顕著な反応が返ってきた。

「えーっ？あのスマーラに？やめてよ、縁起でもない」

さも嫌そうな声を出しながらなんとなく嬉しげにみえるのは、薄暗がりの光の加減でもなぞうである。

「とにかく、この森を抜けましょ。王都までの足は、どうかで調達する事ができるでしょうから」

「うそ」

しつかつと額をあつて、一人の少女は再び數と格闘しました。

「クレイの奴今頃、皆の隊長さんから」の知らせ聞いて無茶苦茶心配してゐるんじゃないかな？」

最後に『『えられた抱擁と口付けを思に出し、そつと頬を染めながらセリフイズも小さく笑つ。

真維の返事は暢氣である。

「じょうがなによ。クレイとは、あやこに困つてもうないと困るんだもん」

「やうですね」

藪に向かって、盛大な罵声を浴びせ始めた真維に微笑んで、セリフイスはそっと北の砦を振り返った。

クレイ、行つて来ます。

ああ、待つている。

はい……

別れ際の言葉が心を支える。

「必ず帰ります。クレイ」

誰にも聞こえないよう、セリフイスはそっと呟いた。

部隊長からの知らせを受け、クレイスは北の砦の門前に出てきていた。

黎明の中、一人が居るであろう国境の森が、黒々とした闇の溜まり場に見える。

旅は初めから、一人の少女に試練を与えてきた。おそらく進むに連れて困難は大きくなるだろう。

動けぬ自分が歯痒い。

しかし、半ば不具の身体では足手纏いにしかならないだろう。

右手では重いものは持てず、軽く引き摺る右足は歩く分には支障の無いものの、走る事は適わない。

事此処に至つては、それぞれができる事をするしかないのだ。

「一人とも、帰つてこいや……」

搾り出すように咳いて、クレイスは色砂の入った袋を取り出した。

魔導士が魔方陣を描く時に用いる砂である。

袋の金具を開けて砂を少しづつ地面に落としながら、口の中で呪文を組み立て始める。

邪眼の魔導士は氣を集中させつつ、皆の周りに呪法を掛けていった。

グリフに輝く筈であった一つの大きな星は、衆俗の眼前に引き出された。

王族への畏敬など欠片も持たぬ手で打ち据えられたついで、国家反逆の罪状を読み上げられる。しかし彼は毅然と前を見据え、刑吏の圧抑を物ともせずに言い放つた。

「我が民よ、グリフの民よ。王の暴挙に屈服するな。己が道、己が信じる最善の道を進め。そして、自らの誇りを捨てず、自由を掴み取れ！」

まさにグリフの正当な世継ぎとしてのその姿に、貴き血筋を卑しめる為に下された残酷な仕打ちに。集まつた者達は一様に涙した。

黄金の髪の王子に下された刑罪は、『鋸挽のいわこひき

下層の者に処せられる極刑である。

刑具に縛り付けられて路上に置かれ、道行く者達に生木の鋸で首を挽かれる。切れぬ鋸で少しづつ喉を裂かれる事による壊死や失血は緩慢で苦しみも深く、死に至るまで十数日掛かる。

あまりの惨状故、先代の王の治世には廃止されていたものであつた。

その刑罰を、仮にも甥である前王の遺児に下す。

グリフォ王のなんといつ悪逆非道。民衆は恐怖と共にやるせない憤りを感じていた。

それが為、刑の執行が宣言されても、誰一人としてざわめきの波の中から前に出る者は居ない。

皆一様に尻込みし、高貴なる者への冒瀆者となるのを恐れた。

しかし、既に刑は宣言されている。そのまま誰も鋸に手を触れなくとも、既に死人とされた王子が刑具から解かれる事はない。

水も、食料も与えられぬまま、曇天の空の下餓えと乾きによつて死んで行くのを待つだけである。

いや、それよりも、業を煮やした刑吏達によつて辱めを与えられ、死に至る事になるかもしねれない。

閉ざされた未来を見据えるように、王子は静に民衆を見詰めていた。

そんな王子の前に、一人の女が歩み出た。

深く被つたマントのフードに顔を隠し、民衆の罵声を浴びながらも、刑吏から鋸を受け取る。

そして初めの一挽きをするべく近寄る女に、王子は優しい笑みを浮かべて頷いた。

「頼む」

これが、彼の最後の言葉である。

王子の言葉を受け、女はフードを跳ね上げた。

金の髪、鮮やかな緑の瞳。

明らかにエルド族の特徴を持つ美女は鋸を投げ捨てると、隠し持つたナイフを振りかざし一気に王子の喉首を掻き切った。

撒き散らされた血潮に驚愕の悲鳴が放たれ、制止しようとする刑吏の怒声が乱れ飛ぶ中、女は王子の血に塗れたナイフを自分の心臓に突き立てた。

「お供します」

女はそう呟いたといふ。

せつかくの見世物を台無しにされたグリフ王は激怒した。

事切れた王子と女の遺体をそのまま広場に打ち捨てさせ、王子の首だけを切り取って長い槍の穂先に突き刺し、遺体の側に高く掲げた。そして、『それらが腐るに任せよ』と下しあいた。

絶える事のない遠雷の響く暗い空の下、群衆が遠巻きに見守る中。曝された王子の首と一人の遺体は、兵士達に監視されて近寄る事すら何んない。

死してなお辱めを受ける王子に、人々は再び涙した。

しかし、四日後。

広場に落雷が落ちた。

軽い混乱を収めた兵士達が、遺体と首が消えていることに気がついた。

首があつたはずの穂先には、代わりに一枚の書状が刺されてあり風に揺れている。

そこには、こう認めてあつた。

『我等が眞の王を返して貰ひ』

折りしもその日、真維達は国境を越えた。

## 1・(後書き)

黄金の日々、見た事ありますか？痛そうですね。あれ。五右エ門の油揚げとか。昔の刑罰は痛そうで怖いです。

昼なお暗い曇天の下。グリフの王城はそびえている。

グリフ国内に入つてから、太陽の姿は厚い雲の向うだ。

天候は常に荒れ、遠雷の途切れる事は無い。

荒れ果てた国内に負けず劣らず、グリフの王都も荒廃の影に覆わ  
れている。

重層な落し扉を見上げながら、真維はゼルダが連れて行つた少女  
のことを思い出していた。

唯一安心できる人だと、縋り付いてきた少女。

エルド族の子供であつたから、厳密には少女ではなかつたが、『  
お姉ちゃん』と呼びかける姿は可愛らしく、妹のように思えた。

必ず母親を助け出すと約束したのに、結局はそれを反故にしてしまつた。

悪い事をしたと思う。

ゼルダが行方をくらました後、少女はどうしているのだろう。ひ  
ょつとして、共に王城の地下に捕らえられているのだろうか？

エルド族は子供であつても容赦なく狩られているらしい、今頃、

どんな目に遭つてゐる事か…… そういえば、名前すら聞いていなかつた……

ゼルダを見つけ出す他に、少女を見出す事もできるのだろうか？  
自分にそれほど力があるだらうか？

真維は足元に視線を落とした。

煤けたスカートが情けない。自分の無謀さ加減を嘲笑つてゐるような気がする。

自分ならゼルダを見つけ出せる、そつ確信してここまで来た。それは思い上がりなのだらうか？

王都に着いて既に十日。

アルムレイドの刑死に続いての試練は、搜索計画の要ともいえる場所にあつた。

あてにしていたのは、以前の潜入操作でセリフィスが難民の少女の情報で潜つた抜け穴。しかし前には兵士が立ち、入る事は不可能になつっていた。

ゼルダが捕えられているのなら、おそらくは地下牢。そして、他の魔導士やエルド族、例の大樹なるものも、王城の奥深くに在る筈なのだ。

潜り込めなければ、何も出来ない。

他に王城地下に入るルートは無いものか、真維達は手を尽くして

都の中を捜しまわった。

だが、土地鑑も無く、協力者もいない状態では、焦る気持ちとは裏腹に、捜索は遅々としてすすまない。

こんな自分をゼルダが見たら、なんと言ひだらう。

そう、さつと……

「な～に黄面てんのよ、一ノの阿呆」

呟いて、真維はぐいと顔を上げた。思い上がりだろうが何だろうが、ここまで来たのだ。前に進むしかない。後ろに下がる道は、自分で閉ざしてきた。

「おっしゃー」

一つ気合を入れて、真維はぐるりと城門を背にした。

勢いよく歩み去る茶髪の娘の姿を、黒い双眸が見詰めている。

そつと木陰から姿を現したのは、11～2才の少女であった。

艶やかな黒髪に、白い肌が鮮やかに映える。あと2～3年後の姿が、かなり期待できそうな美少女である。

小首を傾げると、腰のあたりで一つに括った黒髪が、肩に当たつてさらさらと音を立てた。

細く長い腕を組んで、暫し考えるよつた仕草をとり、再び真総の後姿を見詰める。

その黒い瞳は、瞳孔と同じくらい黒い虹彩で、一瞬ただ黒いだけに見えるほど神秘的であり、小作りにまとまつた顔つきは可憐であった。そして、花弁のような薄紅の唇は、にやりと、歪められた。

気合いを入れなおした真維が繁華街まで戻つてくると、なにやら騒がしい喧騒に包まれていた。

「いいぞ、ねーちゃん」

「やれ！やれー！」

人だかりになつた場所から、そんな野次が飛んでくる。

「まさか……」

嫌な予感に眉を顰め、小柄な体を最大限に生かして、人の森を抜けると。

ガツシャーン。

陶器の碎ける音と共に、男が宙を舞う。

どさりと落下した場所は、丁度真維の目の前だった。

観衆の哄笑を浴びつつ、白目を剥いた男は、実に人相が悪い。

その上みすぼらしく、いかにも日雇いの労働者といった風情のむさい男だ。

泡を吹いて涎を垂らした口からは、濃厚な酒の匂いが立ち上つていた。

最近頗に増えたらしい、流れ者の一人なのだらう。

グリフォ国内は、魔法兵器製造のあおりをくらつて天候が荒れ、各地で天災の被害が出ている。当然住む土地を追われ、流民となつた人々は、次第に職を求めて王都に集まり、王都周辺には、貧民窟のような流民村が形成されていた。

行政府は各地の人の流れを止めるために、国内の移動にも鑑札を発行し、それを持たない者の移動を禁じてはいたが、ほとんど焼け石に水の状態で、蟻が群がるように流民達は王都に集まつてくる。それにつれて、窃盗、強盗なども頻発し、王都の治安も次第に悪化している。

スラム化は、下町に行くほど酷くなり、真維達が宿を取る繁華街周辺では、自警団すらも形骸化しけ、不逞の輩が我が物顔でのし歩く、乙女が歩き回るには、不似合いな場所となつてている。

だが、逆に言えば、余所者が潜り込むには最も楽な場所でもあるのだ。

真維達は、身寄りを無くし、田舎からやつてきた姉妹。そんな風情でこの街に溶け込む事が出来ていた。唯一の弊害を除けば……

「あちやー。またか……」

額を押さえ、男が飛んできた方へ、恐る恐る顔を向ける。そして、素つ頓狂な声をあげた。

「ガウ姉?!」

すらりとした長身に、流れるような黒髪の美女が、埃を落とすよ  
つて両手を叩き合わせている。

「あら、真維。お帰りなさい」

花の顔をほころばせ、至極優しい口調で語りかけてくる彼女の後  
ろから、怒りに赤黒くなつた男が踊りかかる。

「ちょっと待つてちょうどだいな」

柔らかな声と共に、肘鉄が男の鳩尾に叩き込まれた。悶絶して空  
を切る右腕を捕え、腰をひねつて担ぎ上げると、その勢いを利用して投げ飛ばす。

教科書に載りそうなほど見事な一本背負いである。

重なり合つて伸びた男達を確認して、観衆が一気に盛り上がつた。

やんやの喝采のなか、ガウと呼ばれた黒髪の女は優雅に一礼して  
観客へ微笑み、サービスに喜んだ野次馬から御揃りまで朕で來た。

遠慮なく広げたエプロンへ、チャリチャリと臨時収入が集まつていく。

「ち……ちょっとこいつち来なさいよ……」

痛む頭を抱えながら、真維はエルの腕を掴んで、彼女が出てきた  
店の中へ駆け込んだ。

店の外からは、伸びた男達へ浴びせられる觀衆の嘲りと、ショーンの終わりを残念がる声が聞こえてきたが、真維は構わず店の奥へと入っていく。

「ガウちゃん終わったかい？　あ、マイちゃんおかえり」

店の女将が帳場から顔を覗かせる。

「おばさん、ただいま。ガウ姉借りるね」

「いいともさ、これで暫く静かだらうから」

人の良さそうな女将が二口一口笑うのに一礼して、真維は階段を駆け上がった。

食堂の上に宿屋がある、よくある造りの街宿で、真維達三人は、姉妹として一部屋を借りていた。

自分達の部屋の中にエルと共に飛び込むと、やつと腕を開放された黒髪の美女が、小さな溜息をつく。

「どうしました？　マイ」

そんな女に、真維は盛大な溜息で応酬した。

「どうもいつも無いわよ。何してるので？」

呆れ声に、女はきちんと背筋を伸ばす。

「当然の報いよ。酔っ払って婦女子に絡むなど、まともな殿方のす

る事ではありませんわ」

当たり前、という顔の女に、真維は肩を落とした。

「んじゃあ、質問変える。何したの、あいつら?」

これには顕著な反応が返ってきた。怒りを含んだ青い瞳がひとと真維に注がれる。

「あの不埒者共は、酔っ払って絡んできただけでなく、セリフイーのお尻に触つたんです! ! 許さ無いわ、絶対に。セリフイーに触れていの殿方は、世の中に一人だけよ」

それだって、本当は許したくないのに、と、拳を握り締めて息巻く美女に、真維は更に脱力した。

「なるほど、確かに、あんたが怒るはずだね……」

弊害といつのはこれである。

余所者が溶け込みやすいのは確かなのだ。現に、素性すらしかとは判りもしない女三人を、鑑札があるという理由だけで、この宿の女将は何の疑いも無く受け入れ、言い訳の、仕事を探しに来たと言う言葉をそのまま受け取つて、定職が見つかるまでと、宿や食堂での用事を世話してくれていた。

女将の人柄に甘えて、丁度いい隠れ蓑として働いているのだが、飯屋には付き物の酔っ払いや、性根の悪い輩が、何かとちょっかいをかけてくるのである。

水準以上の娘が三人も揃っているのだから、当然といえば当然なのだが、これに激烈に反応したのはセリフイスである。

もともと正義感にあふれ、女騎士としてカリリストの治安にも力を尽くしていた彼女なのだ、そして、仲間を守るという使命感にも燃えている。

故に、真維やガウディアに言い寄つたり絡んだりする連中は、悉く彼女によつて排除されていた。

ところがおかしな事に、自分に対しての悪戯には結構我慢強いのだ、なにをされても微笑んでやり過ごすとしてしまひ。

だが、今度は反対に、セリフイスの事となると黙つておられないのが、目の前にいる美女であつた。

ガウディアというのが長い呼び方だが、彼女は実の所、カリストの女神官であり、その正体は、元グリフのスパイ兼刺客である。

今はダイナの良人となつたアルマンティン・ラムダが、帳簿改竄の陰謀に巻き込まれたとき、グリフ側の間者の監視と後始末を請け負つていたのが彼女であつた。

通称白鴉。卓越した殺人技術と攻撃魔法を操る暗殺者。あでやかな銀髪の女という以外、その素顔を見た者は一人も居ない。

セリフイス・ラムダ。いや、当時のセリフイー・ノアトウンのほかは。

正体を見破られた彼女には、二つの道があつた。

一つはセリフイーを殺し、請け負つた任務を遂行すること。

一つは觀念し、間者として縛につくこと。

しかし、セリフィスは第三の道を示した。心穂やかに、カリストの者として暮らす事。

この時、白鶴はこの世から消え去った。

セリフィスは、敬愛するレグナムにすら彼女の正体を明かさず、その心意氣を受けて、ガウディアは、半ば崇拜に近い友情を抱いている。

今回、セリフィスが真維に同行し、グリフォ潜入をすると聞くや、一足先にグリフォへ入り、どう渡りをつけたものか、しつかり鑑札や手形を用意して、国境の森の入り口で待っていたのである。

以来三人で旅をしてきた。

その間のガウディアのセリフィスへの傾倒ぶりはものすごく、お揃いで染めた黒髪とあいまって、外から見るなら妹思いの美しい姉なのだが、間近で見ている真維には、『悪女の深情け』という言葉が浮かんでくる。

あの日雇い労働者達は、触れてはならない逆鱗に触れたのだ。

「気の毒に……」

真維はがつくつと肩を落とした。

もはや何も言つ氣にならない。

初めの内こそ、敵国に潜り込んだ工作員なのだから、もつ少し穩便にとか、目立たないよう、などと一人に注意していたのだが、そんな事はガウディアの方がずっとエキスパートなのだ。

目立たぬ者静かな者が、間者の取るもつとも多い姿である。現に、少しでも頭のある捜索者ならば、まず真っ先にそういう者を狙つて絡め取る。

ならば、最も目立つ者、騒がしい者、何処に居ても目を引く者ならばどうか？ これも疑惑の対象となる。細昨や間者には、大道芸人に成ります者も多い。

しかし、街の中のちょっとした人気者。程度であれば、奇妙な事にそれほど目立たないのである。

現に、三人は宿屋の腕つ節の強い看板娘としてこの界隈では名を馳せはじめていたが、戦争に忙しい軍隊は、レジスタンスや間者を警戒してはいても、三人の娘の顔を憶えようとはしなかった。

結局、餅は餅屋である。

真維はガウディアのする事に、文句を言つのは止めていた。

ついでに真維も、護身用に持ち歩いているフライパンで、じろつきを3・4人撃退しているのだから、強い事はいえない。

「それで……今日はどうでしたの？」

一段声を低めて、ガウディアが訊ねる。真維は肩をすくめて首を

振った。

「アハ……」めんなさいね、真維

自嘲気味の溜息が漏らされ、ガウディアは窓辺へと歩み寄った。

鎧戸の隙間から漏れる、細い光に目を落とし、溜息混じりの声が  
出る。

「わたくしが、もう少しグリフのことに詳しければ、貴方にこんな苦労をさせはしないのに……」

元間者とはいっても、白鶲はグリフの者ではなかった。

暗殺と情報収集を請け負う特殊技能者として、グリフと契約を交わしていただけなのである。もう一つ正確にいえば、グリフの有力貴族が、個人的に白鶲と契約していたのであって、グリフ自身とはまったく関係ないともいえた。

その貴族も、もうこの世には居ない。

以前の繋がりを利用して、鎧札と手形を手に入れはしたもの、王都の中の地理に関しては、ガウディアも真維達と大差がなかった。

「役に立たなくて、ごめんなさいね……」

謝る年上の女性に、真維は何時ものあっけらかんとした笑顔を向ける。

「気にしない気にしない。なんとかなるって。それにさ、ただ無駄

骨だったわけでもないのよ

「何か、ありましたの？」

茶水晶の瞳が悪戯っぽい光を帯びる。

「ま、ね。大した事じゃないんだけど、面白い噂を聞いたの」

言いつつ真維も窓辺に歩み寄る。

鎧戸に手を掛けて思い切りよく押し開けると、夕暮れ間近の心地よい風が吹き込んでくる。

窓にガラスも入らないような安宿であるが、三階にあるこの部屋からは、城下町が見渡せ、初夏に向かう季節にはありがたい涼風が吹き入っている。真維は結構この部屋を気に入っていた。

「えーと、東西南北……あっちだ」

四方を確かめてから、真維は東の方を指差した。

「あちらは、山の方ね」

「うふ」

半山城であるグリフ城がそびえる山腹から、二重の城門を経て、貴族達の住む一の郭、さらに大きい城門を通して、城下町の大通りや、煩雜な町並みが屋根の波に沈んでいく。

マイが指差したのはその波の向い、爪先上がりに小高くなつて

いへ丘に点在する瀟洒な館が集まる地域であった。

「どんな噂ですか？」

邸宅群を見ながらガウティアが問う。

「お化け屋敷だって。面白そうだから、見に行ひよ」

可愛らしく首を傾げてみせる少女に、黒髪の美女も微笑み返した。

「いいですわね、セリフィーも誘いましょう」

「うん」

マイが頷いた時、軽いノックの後にドアが開かれた。

「真維、コル……じやなかつた、ガウ姉。お店が込んできたので、お願いしますって、おばさんが呼んでます」

はあい、と元気に返事をして、真維が飛び出していく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2043x/>

---

蒼の封印

2011年11月20日07時28分発行